

なし「幸水」の加温ハウス栽培

1. 試験のねらい

県内のなし栽培農家の間では、労力分散だけではなく高収入も期待できる施設栽培への関心が高まっている。そこで加温ハウスでの樹体の生育特性を明らかにするとともに、6月下旬から7月上旬収穫の作型の栽培管理技術について検討した。

2. 試験方法

28年生の幸水を供試し、加温ハウス栽培を行った。面積は360 m²で棚上0.8 mに自動カーテンを設置した。換気は屋根谷部の自動換気と、サイドの巻き上げで行った。灌水は点滴チューブで行い、病害虫は発生状況を見ながら必要に応じて防除した。平成5年は7月上中旬の収穫を目標とし、1月22日にビニル被覆し2月12日に加温を開始した。平成6年は6月下旬の収穫を目標とし、1月11日にビニル被覆し1月18日に加温を開始した。

3. 試験結果および考察

露地栽培の各生育段階と同じになるように温度管理を行ったところ、果実の成熟日数（開花盛～収穫盛）は露地栽培と同様に130日前後だった。ジベレリンペースト処理により3～5日間熟期が促進された（表－1）。また、果実肥大、品質共に良好だった（表－2）。

栽培管理は以下のようにする。

(1) 温度管理

温度管理の目標は表－3のとおりである。加温までに1週間程度の無加温期間を設けて地温の上昇を図る。最高気温は加温開始から開花期までは23℃以下、最低気温は開花始まで7℃、開花期は10℃で管理する。開花期以降は露地栽培の生育段階と同じ温度を目標とする（表－3）。

(2) 水分管理

ビニル被覆時には多めに灌水を行う。その後は、地下30～40 cmのpFを1.8～2.2程度に保ち、pF 2.3を超えないように灌水を実施する。

(3) 着果管理

露地栽培よりも着果量を制限し、10 a当たり8000～9000果程度とする。摘果は早めに行い、予備摘果は満開後20日に、仕上げ摘果は満開後30日に実施する。

(4) 整枝せん定

短果枝の維持が悪い傾向がみられるが、えき花芽の着生は安定して良好である（表－4）。短果枝と長果枝による果実肥大や品質に大きな差はない。これらのことから、せん定は露地と同様に考えて、側枝の間隔は35～40 cmとし、予備枝を配置する。

(5) 病害虫防除

被覆によって病害の発生はかなり抑えられる一方、アブラムシ類やハダニ類の増殖が速いので初期防除を徹底する。なお、被覆除去後の防除は露地栽培に準じて行う。

4. 成果の要約

幸水の加温ハウス栽培は、1月中旬からのビニル被覆、加温で6月下旬～7月中旬の収穫が可能であった。果実肥大、品質共に良好で、適正な温度管理を行えば、果実の成熟日数は露地栽培と変わらないことから、計画的な生産が可能になると考えられた。

(担当者 果樹部 益子 勇)

表-1 生育特性 (平成6年)

	催芽期	開花盛	収穫始	収穫盛	収穫終	果実の成熟期間
ハウス栽培	2.08	2.20	6.21	6.29	7.05	129日
μGA処理	2.08	2.20	6.15	6.26	7.04	126日
露地栽培	4.07	4.23	8.18	8.29	9.08	128日

表-2 果実品質 (平成6年)

	果重(g)	糖度(Brix%)	硬度(lbs)	酸度(pH)
ハウス栽培	363	11.6	4.1	5.18
μGA処理	369	11.7	4.3	5.09
露地栽培	384	12.4	4.3	5.33

表-3 温度管理目標 (℃)

時期	平均	最高	最低
被覆～加温開始	8	19	—
加温～催芽期	12	23	7
催芽～開花始	13	23	8
開花期	15	23	10
開花終～満開後20日	16	24	11
満開後 21～ 40日	19	25	14
満開後 41～ 60日	21	27	15
満開後 61～ 80日	23	28	17
満開後 81～100日	25	30	17
満開後 101～120日	26	30	サト解放
満開後 121～140日	25	30	サト解放

表-4 50cm以上の新梢の伸長特性 (平成6年)

	新梢長cm	太さmm	二次伸長率%	えき花芽率 (平成5年) %
ハウス栽培	84.6	8.6	24.1	26.7 (24.7)
露地栽培	93.4	9.5	13.0	37.1 (4.5)